

## 女性農業者のさつまいも経営参画を目指して

— 「さつまいもキャリアアップ研修」で若手女性の技術習得を後押し —

現  
状  
と  
課  
題

### 【現状】

- ・各生産部会等の行事には部会員が参集されるため、若手女性が技術を学ぶ場や交流が少ない。
- ・農業事務所の若手女性対象の研修では品目横断的な講義、6次産業化や起業事例の視察等を実施してきたが、対象が固定化してきている。

### 【課題】

- ・女性の経営参画を促進するためには、各自の解決策に結びつく技術や知識習得が必要である。
- ・将来、地域の担い手として社会参画をめざす女性農業者の確保に向けて、新たな対象の掘り起こしが必要である。

普  
及  
活  
動  
の  
内  
容

### 1 香取地域の基幹品目さつまいもでの女性研修の実施

若手女性へのヒアリングから、家族とともに経営改善に取り組むため生産技術や知識を学ぶ場が求められていることがわかった。そこで、香取管内の基幹品目であるさつまいもを取り上げ、新たに「香取地域さつまいもキャリアアップ研修」を令和4年から2年間のカリキュラムで実施することとした。

### 2 新たな対象の掘り起こし

これまで開催してきた若手女性研修の参加者に加え、各市町やJAかとりへの照会や、さつまいも主体の認定農業者の家族をリストアップし、案内の送付や担当から勧誘を行った。その結果、管内各市町から16名の参加申込みがあった。

### 3 各自の経営課題と解決に向けた学びたい内容の明確化

第1回研修（7月）では、農業事務所からさつまいもの生理生態や病害虫など基本的な知識の講習を行った。

また、参加者が各自の経営課題と改善に向け自分が学びたいことをキャリアアッププランにまとめて発表した。

### 4 地域の枠を超えた交流や情報交換

第2回研修（8月）では、JAかとりの労力支援の紹介や栗源集送センターの貯蔵・洗浄選果施設の視察、また、第3回研修（12月）では、多古町と香取市の生産者の貯蔵施設や作業場改善の事例を視察した。参加者は初めて見聞きしたことが多く、質疑応答が活発に行われた。



写真 ハンドリフトで1tを人力で動かせることを体感している様子

今  
後  
の  
取  
組

- ・引き続き、参加者から要望が多かった苗づくりや土づくり、病害虫対策などの技術や知識習得を図り、各自の経営改善への積極的な参画を支援する。
- ・「かとり農業女子ネットワーク」や女性農業士・指導農業士との交流を進め、地域農業を担う次世代の女性農業者の育成を図る。

(担当グループ名 北部グループ)

# イタリアンライグラスの栽培事例調査

— 自給飼料生産の拡大に向けて —

現  
状  
と  
課  
題

## 【現状】

- 輸入飼料価格の高騰が続き、畜産農家の自給飼料に対する需要はこれまで以上に高まっている。
- WCS 用稲と飼料用トウモロコシは収穫が8～9月に集中し、面積拡大には労力確保や機械の加増が必要なため、困難となっている。

## 【課題】

- 自給飼料生産のさらなる拡大に向け、作業分散が可能な飼料作物の導入を検討する。
- WCS 用稲や飼料用トウモロコシとは収穫時期が重ならないイタリアンライグラスの地域適応性を把握する。

普  
及  
活  
動  
の  
内  
容

### 1 栽培概要等の調査

畜産農家2戸において、畑地・水田での秋まき栽培を調査した。収穫時期に降雨が多く、水田では土壌が軟弱になり、収穫機械の走行が妨げられ収量が低くなった。



写真1 出穂期調査の様子

表1 栽培概要・生育調査・収量調査結果

区分	は種日	10a 当 りは種量	10a 当 たり 施肥量等	出穂期*		刈取 日	予乾 日数	サイレージ**		
				草丈	水分			現物収量	水分	乾物収量
畑地	11/4	4kg	堆肥なし NPK 各5.6kg	112cm	84%	5/4	1.5	1,967kg	48.8%	1,006kg
水田	9/30	3kg	牛ふん堆肥6t	115cm	83%	5/2	3.0	655kg	36.2%	418kg

\*: 出穂期調査は4月26日に実施 \*\*: サイレージ調査は8月3日に実施、収量は10a 当たり

### 2 サイレージ品質の分析 (畜産総合研究センターによる飼料分析)

乾物中のエネルギー量 (TDN) はトウモロコシと同等であった。一方、粗蛋白質が標準値よりも低いことから、向上のため、栽培管理技術の改善が必要と考える。

表2 飼料分析結果と日本標準飼料成分表の値 (乾物中%)

飼料名	粗蛋白質	粗脂肪	NFE	粗繊維	ADF	NDF	粗灰分	TDN	DE***	ME***
IRG*(畑地)	4.1	3.7	50.0	32.8	35.4	58.6	9.3	67.0	2.95	2.50
IRG(水田)	6.2	3.6	45.0	34.2	37.5	63.4	11.0	65.9	2.91	2.45
IRG(1番草・出穂期)**	12.5	4.6	41.6	30.7	36.2	61.1	10.6	66.9	2.95	2.49
トウモロコシ(黄熟期・東日本)**	8.5	3.3	58.1	23.5	30.1	48.9	6.6	67.9	2.99	2.54
イネ(飼料用品種・黄熟期)**	5.8	2.4	51.2	26.0	31.1	48.3	14.6	54.0	2.38	1.95

\*: IRG=イタリアンライグラス \*\*: 日本標準飼料成分表2009年版より \*\*\*: DE、MEの単位はMcal/kg

### 3 調査結果の共有

生産農家と調査結果を共有し、次作の収量・品質向上の方策を検討した。

今  
後  
の  
取  
組

- 粗蛋白質成分向上のための栽培技術確認
- イタリアンライグラスの自給生産を行っていない畜産農家の意向把握



写真2 収穫作業の様子

(担当グループ名 北部グループ)

# 新規ねぎ栽培者の育成

— 初年度から一人前を目指す —

現  
状  
と  
課  
題

## 【現状】

- ・水稲との複合品目で、秋冬ねぎを新規に取り組む事例が増えている。
- ・栽培面積拡大につれ、作業が後手になり、品質が低下する傾向がある。
- ・ほ場の排水が滞り、土寄せ作業が遅れ、市場規格を満たす軟白長の確保に苦労している。

## 【課題】

- ・新規栽培者は秀品率を優先し、売上を確保することでモチベーション向上につなげる。
- ・明きよの施工や畝の向きの調整により、排水を促すことで適期作業を実現する。

普  
及  
活  
動  
の  
内  
容

## 1 関係機関との連携によるモデル育成

JA かとり、農業者総合支援センター及び農林総合センター東総野菜研究室と協力し、新規に秋冬ねぎ栽培をはじめた青年農業者を対象に、地域における水稲との複合経営のモデル農家の育成を図った。

病虫害防除や追肥、土寄せの時期等に、関係機関で定期的に巡回指導を行い、適期作業を促した他、農家と共に管外での勉強会に参加する等、情報収集にも努めた。

## 2 排水対策の徹底による良品生産支援

栽培後半の降雨で土寄せ作業が遅れ、軟白長が確保できなかった昨年作を振り返り、今作では畝間の陽当たりが良い南北畝を奨励し、畝間を額縁明きよと接続し、表面排水を促した。

こうした管理の徹底により、対象農家は秋冬ねぎ栽培が初年度でありながら、市場出荷の規格を満たす軟白長や葉数を確保でき、家族全員が意欲的に栽培に取り組んでいる。生産物の部会内での評価も高く、部会全体の生産意欲の向上につながることを期待される。



写真1

定植作業の指導の様子



写真2

初めて収穫したネギ

今  
後  
の  
取  
組

- ・作業時間や収益性を整理し、秀品率を維持できる適正規模や、さらなる規模拡大に向けた機械設備や雇用への投資のタイミング等を検討する。
- ・今年度は病害や生育初期の曲がりの発生が認められたので、それらの発生要因となる気象条件を整理し、農家と共有することで次年度の適期作業につなげる。

(担当グループ名 北部グループ)

# ヤマトイモの規模拡大のために

## — 誰でも使える収穫機の開発 —

### 現状と課題

#### 【現状】

- ・多古町のヤマトイモの作付面積146haのうち5ha以上の農家(13戸)が79haを栽培している。
- ・10a当たりの総作業時間は154.2時間で収穫作業が2割を占め現行の作業機は製造中止になっている。

#### 【課題】

- ・産地を維持するには大規模農家の規模拡大がポイントとなる。
- ・収穫機の更新ができない。
- ・収穫機の調整には熟練の技術が必要であり、イモの拾い上げ作業が重労働である。

### 普及活動の内容

1 今までの試作機はイモに傷がつく  
平成28年から3年間、ナガイモの掘り取り機やコンベア、振動を備えた収穫機の実演会をヤマトイモ部会と共催で開催した。

しかし、イモは地表面に出るものの、大型のトラクターが必要で傷が付きやすい等の問題があり、関係した会社は開発を断念した。

2 事業の導入と開発チーム作り

令和2年度に農林総研や担い手支援課と情報共有し、翌年に農研機構を加えて検討した結果、「農業機械技術クラスター事業」に応募した。

令和4年度に事業採択になりメーカーと共に現地調査、関係者による開発チームを組織した。

また、ヤマトイモ部会内の若手を中心に6名の機械開発チームを設立し開発に係る意見集約の場と位置付けた。

誰でも使用できる収穫機としてU字型の掘り取り機を試作し現地で使用試験を実施している。  
なお、令和6年に完成する予定である。



写真1 試作1号機



写真2 掘り取り状況

### 今後の取組

機械開発チームとの協議の中で課題とされた以下の項目について機械化を模索していく。

- ・掘り取り精度の調査を行う中で、植付機の精度の低さが明らかになった。
- ・イモの拾い上げ作業の機械化を検討していく。
- ・土壌消毒時の薬剤の残量が分からず、作業に支障をきたしている。

(担当グループ名 西部グループ)

# ナシ大苗導入で早期成園化を目指して

— ナシジョイント栽培用大苗育成ほ場見学会の開催 —

現  
状  
と  
課  
題

## 【現状】

- ・香取地域では樹齢30年以上の老木によるナシの生産が多い。
- ・ナシは樹齢30年を超えると生産性が低下するため、改植が必要となるが、計画的に改植が進んでいない。

## 【課題】

- ・産地の生産力維持のため計画的な改植を進める。
- ・改植を行った際の減収分を最小限にするために、早期成園化を確立する。
- ・早期成園化に向けて大苗導入を推進する。

普  
及  
活  
動  
の  
内  
容

## 1 ナシ大苗生産見学会の実施

香取地域では園の若返りのため、計画的な改植を推進している。特にナシジョイント栽培は、早期成園化と省力化が可能になるため導入を勧めている。

そこで、若手生産者を対象にナシジョイント栽培に使用する、大苗についての特徴や注意点の理解を促すため、10月27日に有限会社大千園にてナシ大苗生産現場の見学会を開催した。



写真 ナシ大苗育成ほ場見学

## 2 見学会後の変化

見学会には香取地域2組合4名が参加し、組合を超えた交流を図ることができた。参加者の中には、すでにジョイント栽培を実践している生産者がおり、参加者間でジョイント栽培の技術的課題での情報交換がされ、ジョイント栽培の理解が深まり、導入に向けての意識づけができた。

その後、見学会の参加者がジョイント栽培実施者のほ場へ見学に行く等の行動につながった。見学を実施した事で、ジョイント栽培導入への意欲向上、生産者間の交流促進が図ることができた。

今  
後  
の  
取  
組

- ・ナシ大苗導入後のジョイント栽培実践への支援。
- ・具体的な改植計画のモデル作成。
- ・早期成園化に向けての根域制御栽培実施の実証。

(担当グループ名 西部グループ)

# 花き生産における組織活動支援

## — 資材価格高騰に負けない経営体の育成 —

現  
状  
と  
課  
題

### 【現状】

・国際情勢の変化により、各種資材が高騰している。化成肥料は品薄状態となり、今後も同じ情勢であれば入手困難になることも予想される。  
・個別販売がメインであるが、品目ごとに後継者世代が中心となって組織活動が行われている。

### 【課題】

・燃油・肥料価格高騰に対する対策（代替肥料の知識習得、関連補助事業の周知）  
・収益維持・向上に向けた栽培指導  
・組織活動の活発化による花き生産者間の情報共有

普  
及  
活  
動  
の  
内  
容

### 1 資材価格高騰対策に向けた情報提供

代替肥料を活用した施肥管理を検討するため、毎年開催している土壌診断検討会やほ場巡回にて根張り促進効果のある腐植資材や有機質肥料の情報提供を行った。また、燃油費削減に向けて、関連する補助事業の周知を行い、ガーベラや胡蝶蘭ではセーフティネットへの加入やヒートポンプ導入を促すことができた。



写真1 ほ場巡回

### 2 収益維持・向上に向けた栽培指導

シクラメンでは、海匠地域の生産者と合同で現地検討会を開催し、適期開花へ向けた栄養診断値の数値共有、情報交換を行うことができた。



写真2 県外視察研修会

### 3 組織活動の活発化に向けた研修会の開催

先進的な経営の考え方を習得するため、カーネーション視察研修会を開催した。

愛知県の種苗メーカーでは新品種の試験ほ場の見学、育成担当者との情報交換を通じ、品種特性を学ぶことができた。先進農家への視察では、養液土耕栽培における栽培管理等について理解を深めることができた。

今  
後  
の  
取  
組

・既存の化成肥料に代わる資材の実証試験の実施、組織での結果共有  
・未加入農家への施設園芸セーフティネット事業の周知及び申請支援  
・継続的な栽培指導による販売金額の維持・向上  
・後継者の経営能力向上に向けた、経営面の指導（経営費の記帳支援等）

(担当グループ名 東部グループ)